

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19952

研究課題名(和文) シリア・アルメニア教会間のキリスト論論争における「キリストの腐敗せざる肉体」

研究課題名(英文) "Incorruptible Body of Christ" in Syro-Armenian Christological Controversies

研究代表者

浜田 華練 (Hamada, Karen)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：70964469

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、非カルケドン派(合性論派)において6世紀以来問題とされてきた、「キリストの肉体の不朽性」をめぐって、アルメニア教会とシリア正教会の間で繰り広げられてきた議論を、時系列に沿って整理するとともに、主にアルメニア教会側で、キリストの肉体の不朽性に関する教義の成立・発展過程を分析した。その結果、アルメニア教会はシリア正教会側で異端とされたハリカルナッソスのユリアノスの見解を支持したという従来の定説とは異なり、6世紀のシリア教父マブブグのフィロクセノスの論に依拠しながら、「キリストの肉体は、復活の前から不朽であった」という教義を発展させていったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ごく限られた時代のごく限られた地域に生きたキリスト教徒が「キリストの肉体が腐敗しうるかどうか」という問いに取り組んだ過程に光を当てたものである。現代を生きる我々の目には、無意味かつ非生産的な問いに見えるが、「人間となった神」たるキリストの「肉体」の在り方を徹底的に追求する姿勢の背景には、「肉体」を「人間を人間たらしめるもの」として定義し、そしてその肉体をもったまま神に近づかんとする意志が潜んでいる。人間はあくまで「肉体」をもって完成されるべきという強い願いは、技術の発達により人間が「肉体」を伴うことがもはや自明ではなくなりつつある現代社会においても重要な示唆を与えている。

研究成果の概要(英文)：In this project I have investigated the debate between the Armenian Apostolic Church and the Syriac Orthodox Church over the 'incorruptibility of the body of Christ', which has been an issue among the non-Chalcedonian (miaphysite) Christians since the 6th century. Especially I have analyzed the process of formation and development of the doctrine of the incorruptibility in the Armenian theological tradition. It has been a widely accepted theory that the Armenian Church supported the view of Julian of Halikarnassus, who was considered heretical by the Syriac Orthodox Church. However, my research proposes a hypothesis that the Armenian Church developed their doctrine, which insists that the body of Christ was incorruptible even before the resurrection, based on the Christological view of Philoxenos of Mabbug, one of the most notable Syriac theologians in the 6th century, whose writings were translated into Armenian and used as a source for refutation against Chalcedonians.

研究分野：宗教学

キーワード：東方キリスト教 キリスト教神学 キリスト論 シリア語 アルメニア語 アルメニア教会 シリア正教会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、シリア・アルメニア教会間の「キリストの肉体の不朽性」をめぐる議論を分析対象とする。6世紀のアンティオキアのセベロスとハリカルナッソスのユリアノスの論争以来、「キリストの肉体が腐敗しうるか」という問いについて、非カルケドン派の間で見解が分かれてきた。シリア正教会は、キリストの「復活後の」肉体は不朽であったとするセベロスの立場を正統とするのに対し、アルメニア教会は「復活後の」という留保なしでキリストの肉体の不朽性を教義として奉じる。

この両者の見解の相違について、6世紀に生じたキリストの肉体の不朽性をめぐる論争において、シリア正教会はアンティオキアのセベロスを、アルメニア教会はハリカルナッソスのユリアノスを支持したことが原因であると従来考えられてきた。しかし、2016年に刊行された *Yonatan Moss, Incorruptible Bodies: Christology, Society, and Authority in Late Antiquity* (University of California Press, 2016)において、6世紀の「キリストの肉体の不朽性」をめぐる論争を繰り広げたアンティオキアのセベロスとハリカルナッソスのユリアノスについて、両者の見解がこれまで考えられてきたほどには対立していなかったことが明らかにされた。この研究成果をふまえて、従来アンティオキアのセベロスとハリカルナッソスのユリアノスの論争の延長線上にあると考えられてきたシリア正教会とアルメニア教会の間の「キリストの肉体の不朽性」をめぐる教義上の相違についても、大幅に見直す必要性が生じた。

2. 研究の目的

本研究は、上記の問題意識から、「キリストの肉体の不朽性」に関する教義が、シリア正教会とアルメニア教会、それぞれの側でどのように発展し、かつ、両者の間でどのような論争が展開されてきたかを、シリア語・アルメニア語の一次文献に基づいて明らかにすることを目指した。

まず、アルメニア教会の「キリストの肉体は、復活の前からすでに不朽であった」という教義は、ハリカルナッソスのユリアノスのキリスト論に由来するという従来の見解について批判的に検討するために、「キリストの肉体の不朽性」という神学的主題がアルメニア教会において正統教義として確立されるに至った課程を明らかにする。そして、アルメニア教会と異なり「キリスト肉体の不朽性」が正統教義として取り入れられなかったシリア正教会において、6世紀のアンティオキアのセベロス以来この神学的主題をめぐるどのような議論が展開されてきたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

まず、研究の第一段階として、6世紀のアンティオキアのセベロスとハリカルナッソスのユリアノスの間の論争について、一次文献および先行研究に基づいて整理し直した。

その上で、6世紀以降のシリア語・アルメニア語文献における、「キリストの肉体の不朽性」に関する記述を分析した。中でも重要なのは、12世紀後半にアルメニア教会・シリア正教会間で生じた神学論争の内容を、当時のアルメニア教会指導者であったネルセス・シュノルハリ(1173年没)の書簡と、シリア側の論客であった神学者ディオニュシオス・バル・サリービー(1171年没)の著作『アルメニア人駁論』である。これらのテキストに基づいて、12世紀のシリア・アルメニア教会間の論争を、その歴史的背景とともに再構築した。

4. 研究成果

この研究によってもたらされた最も重要な成果は、アルメニア教会における「キリストの肉体の不朽性」の教義の形成・発展過程について、従来との定説とは異なる仮説を提示した点にある。アルメニア教会において正統とされる「キリストの肉体は復活の前から(受肉の時点から)すでに不朽であった」という教理は、これまではハリカルナッソスのユリアノスのキリスト論に由来すると考えられてきた。しかし、本研究において数回にわたって実施した写本調査において、ハリカルナッソスのユリアノスの著作がアルメニア語に翻訳された形跡は確認できなかった。むしろ、アルメニア教会における「キリストの肉体の不朽性」という主題は、アンティオキアのセベロスと並び称されるシリア教父であるマブーグのフィロクセノスに依拠しながら発展してきたことが、幅広い時代のテキストの分析から明らかとなった。この研究成果の一部は、すでに英語論文としてまとめてあり、Brill社の *Eastern Christian Cultures in Contact* シリーズから論文集の一部として刊行予定であるが、編集作業に遅れが生じており、刊行時期は未定である。また、この研究成果に基づく英語論文をもう一本執筆中であり、こちらはアルメニアの研究機関 *Mesrop Mashtots Institute* が発行する国際学術誌 *Medieval and Early Modern Armenian Studies* に投稿する予定である。

ここまで述べた通り、アルメニア教会における「キリストの肉体の不朽性」に関する教理の形成・発展過程はかなりの程度明らかになった。その一方で、少なくとも12世紀のシリア・アルメニア教会間の論争において、シリア正教会がアンティオキアのセベロスの見解を全面的に支

持していたことは明らかであるものの、そこに至るまでのプロセスを十分に解明することができなかった。この点については、今後の課題としたい。

この研究のもう一つの成果は、アルメニアの研究機関 **Mesrop Mashtots Research Institute for Ancient Manuscripts** (通称: **Matenadaran**) の主任研究員 **Yvette Tajarian** 氏と行った共同研究と、その成果発表のために 2024 年 2 月 20 日に国立民族学博物館で開催した国際ワークショップ **Manuscripts Crossing Borders: Transcription, Translation, and Transference of Manuscripts in/beyond the Caucasus** である。

国立民族学博物館が所蔵するアルメニア語写本 (中西コレクション・資料番号 C942365518) には、シリア人神学者による著作のアルメニア語訳の断片が複数点含まれているが、これまで日本国内外の研究者によって詳細に分析されたことがなかった。中でも本研究課題にとって重要なテキストは、シリア教父エフレムの説教のアルメニア語訳である。本研究課題がテーマとするキリストの肉体の不朽性については言及されていなかったものの、アルメニア教会におけるシリア教父の受容と広がりについて明らかにする手がかりとなった。この写本を調査するにあたって、2024 年 2 月にアルメニア最大の研究機関であり世界有数の写本アーカイブである **Mesrop Mashtots Research Institute for Ancient Manuscripts** の主任研究員 **Yvette Tajarian** を日本に招聘し、国立民族学博物館で写本の実物を調査・分析した成果を国際ワークショップ(オンライン配信あり)によって広く世界に発信した。その結果、この写本は、本研究課題の射程範囲を超えた研究上の価値を有することが判明したため、本研究課題終了後も共同研究を継続する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Karen Hamada	4. 巻 5
2. 論文標題 An Armenian Manuscript in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Arevelaasiakan gitut'yunner (Eastern Asian Studies)	6. 最初と最後の頁 58-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田華練	4. 巻 52
2. 論文標題 エイコーン 東方キリスト教研究 第52号 2024 New 著訳者など：東方キリスト教会：編 出版社：教友社 税込価格：1760円（本体価格：1,600円）判型：A 5 /114頁 ISBN：発売年月：2024年6月10日 カテゴリ：キリスト教書籍神学書聖書学論文集 この商品を買う 問い合わせる 在庫状況についてのご注意。内容詳細【論文】 聖セルギウスから聖サルキスへ 一二世紀アルメニアにおける『聖サルキス殉教伝』の成立	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 エイコーン 東方キリスト教研究	6. 最初と最後の頁 8-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 浜田華練
2. 発表標題 セルギウスから聖サルキスへ12 世紀アルメニア教会における聖人伝の受容
3. 学会等名 第22回東方キリスト教会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Karen Hamada
2. 発表標題 An Armenian Manuscript in Japan
3. 学会等名 International conference “Armenia-Japan: Past, Present and Perspectives of Future”（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Karen Hamada
2. 発表標題 Syriac Hagiographies 'Translated' by Nerses Shnorhali: Syro-Armenian Cultural Interactions and Development of Armenian Literature in the 12th Century
3. 学会等名 XIIIe Symposium Syriacum et XIe Congres d'etudes arabes chretiennes (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 森安達也、浜田華練 (文庫版解説)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 東方キリスト教の世界 (ちくま学芸文庫)	

1. 著者名 Claudia Rapp, Emilio Bonfiglio, Bernard Coulie, Robin Meyer, Theo Maarten van Lint, Emmanuel van Elverdinghe, Johannes Preiser-Kapeller, David Zakarian, Mark Roosien, Karen Hamada, Alexandra-Kyriaki Wassiliou-Seibt and Gert Boersema, Werner Seibt	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 344
3. 書名 (Chapter 8) Old Issues in the New Regime: The Revival of Religious Controversies Between Byzantines and Armenians after the Fall of the Bagratid Kingdom" in Emilio Bonfiglio and Claudia Rapp (eds.), Armenia and Byzantium without Borders: Mobility, Interactions, Responses (担当範囲236-252)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Manuscripts Crossing Borders: Transcription, Translation, and Transference of Manuscripts in/beyond the Caucasus	開催年 2024年～2024年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
アルメニア	Matenadaran			